

歌誌 黄雞 七十五巻記念合同歌集「饗宴」投稿歌

○黒沼 貞志

歌題 アンソロジー 2019～2023（八十路への道）

夕間暮れ入り日射し入る芒原山辺と野辺を分けて耀かがよへり

荷を置いた園児ら何処と索あなぐれば歓声微かに小春日の丘

汚染記事語れず黙す牛憐れ語れて語らぬメディアと行政

限りある地球の資源知りてなお飽くなき成長求む愚思えり

布施柿の慣わし廃れ僻村の群れ柿花火に夕光は射す

里山の雪の冷気を孕む風籬さつし田渡りわが頬撫でゆく

「春よ来い」唄いて路地行く母娘おやこおり淡雪降り積み足跡隠す

荒梅雨の上がりし空へ一条の虹の架かりし里は夏色

打ち水に暑き鎮まる夕間暮れ漂う昭和の土の香微か

ハレの日に友への陰膳設える吾子の紡ぎし絆憶えり

日の暮れの頭を垂るる向日葵にかたつむり這い野辺たそがれぬ

道の端ビニールプール萎みおり片方に糸引く蟋蟀の声

受験生乗せて列車の進み行く雪積む田の面朝日に煌めく

過疎の村SNSを味方にしディープジャパンで賑わいにけり

花びらが流るるごとく散りにけり老いの桜樹春行くままに

虫時雨賑わう暮れ方処暑の日の蝸・蟋蟀・鈴虫の宴

寂光に枯れ色の増す冬もみじ木枯らしに耐え揺れて競えり

「お名前は」 問う受付に「お名前は」 耳語で囁く付き添う娘

立冬の薄墨色の宮の庭古木の黄落夕日に煌めく

布団干し客を迎える山の小屋歩みし秋の空を風行く

木道の延びる先には草もみじ夕映えの中秋老けゆかん

雨音に目覚めし朝は寒九の日母に添寝の昔蘇えり

ハンモック木立に掛かり風に揺れ人の午睡の気配を残す

一列に車内の座席に座り居りスマホに耽る老いも若きも

秋天の木漏れ日の中歩み行く朽葉積もるる山路やさしき

切り抜いて重ね置きたる新聞は色褪せてなおコラムの出番なし

いつの間に古希の足音近づきぬ今朝も日課の龍頭を巻きたり

「雨音はシヨパンの調べ」 口遊み雨垂れの写真飾る走り梅雨

露の世を覆ふ空気が乱れをり意思の表示を詠まん社会詠

図らずも七十路を越え尚更に思い描けぬ八十路への道

詠者プロフィール

(写真)



(住所) 山形市西田

(生年) 昭和二十二年

(入社年月日) 平成二十九年